

第1部

調査研究の概要及び結果

第1章 調査研究の概要

1. 目的

本研究は、子どもの頃の体験を通じて得られる資質・能力を検証し、人間形成にとってどの時期にどのような体験をすることが重要になるのかを明らかにすることを目的とした。

2. 特徴

(1)子どもの頃の体験と大人になった時の資質や能力の関係について検証

過去の青少年に関する調査では、現在の体験と意識・態度との関係性を検証することが中心で、子どもの頃の体験を大人になった時の資質や能力との関係について検証している調査は数少ない。そこで、本研究では、子どもの頃の体験（過去）とそれらを通じて得られる資質・能力（以下、「体験の力^{*}」という。）（現在）の関係性を検証し、子どもの頃のどの時期にどのような体験が大人になった時の「体験の力」に関係しているのかを明らかにする。

(2)子どもの頃の体験の年代間比較を実施

20代から60代の成人（5,000人）を対象に「子どもの頃の体験」について調査し、その結果を年代間で比較することによって「子どもの頃の体験」の実施状況の推移を明らかにする。

(3)青少年調査と成人調査を同じ質問項目を用いて実施

小学5年生、小学6年生、中学2年生、高校2年生を対象とした青少年調査と、20代から60代の成人を対象とした成人調査とを同じ項目を用いて実施し、それぞれの傾向を把握する。

(4)日本の文化に関する作法や教養に注目

過去の青少年に関する調査では、あまり注目されていなかった日本の文化における作法や教養（「お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべきだと思う」、「日本の昔話を話すことができる」等）に関する調査項目を取り入れ、その実態を把握するとともに「子どもの頃の体験」との関係性を明らかにする。

(5)各年齢期に応じた体験の提示

青少年の健全育成において体験活動の重要性が述べられつつも、これまで具体的な体験の内容や時期について明確な指標が示されてこなかった。そこで本研究では、調査研究結果をもとに、「体験の力」と相関の高い体験のカテゴリを年齢期ごとに示す。

3. 調査内容

(1)子どもの頃の各年齢期における体験

自然体験、動植物とのかかわり、友だちとの遊び、地域活動、家族行事、家事手伝い

(2)体験の力

自尊感情、共生感、意欲・関心、規範意識、人間関係能力、職業意識、文化的作法・教養

(3)葛藤場面における意識

(4)その他（最終学歴、現在の年収、1ヶ月に読む本の冊数 等）

4. 調査方法

(1)青少年調査

- ① 調査対象 小学校高学年から高校生までの青少年 約11,000人
（内訳）小学5年生 2,860人、小学6年生 2,830人、中学2年生 2,480人
高校2年生 2,844人
（抽出）都市規模と学校規模を層化した層化二段集落抽出法

- ② 調査方法 学校を通した郵送法による質問紙調査
- ③ 調査期間 平成 21 年 11 月 27 日（金）～12 月 18 日（金）

(2)成人調査

- ① 調査対象 20 代～60 代の成人 5,000 人
 (内訳) 各年代で男女各 500 人
 (抽出) ア. 回答者の居住する地域ブロックが実社会の構成比と大幅に異ならないように配慮した。
 イ. 回答者の居住する都市規模が実社会の構成比と大幅に異ならないように配慮した。なお、都市規模は平成 21 年 10 月 1 日時点で市区町村を分類し、各市区町村の人口に応じて、「区部」「大市部（人口 20 万人以上）」「小市部（人口 20 万人未満）」「郡部」の 4 カテゴリーとする。
 ウ. 性・年齢ごとに、既婚者・未婚者及び就労・未就労の割合が、実社会の構成比と大幅に異ならないように配慮した。
- ② 調査方法 ウェブアンケート調査
- ③ 調査期間 平成 21 年 11 月 13 日（金）～16 日（月）

5. 研究会

- 座長 明石 要一（千葉大学教育学部教授）
- 委員 青山 鉄兵（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部助教）
- 岩崎 久美子（国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官）
- 金藤 ふゆ子（常磐大学人間科学部准教授）
- 時 代（千葉大学教育学部客員研究員）
- 茅野 敏英（国立青少年教育振興機構客員研究員）
- 土屋 隆裕（統計数理研究所データ科学研究系調査解析グループ准教授）

(注)

※「体験の力」とは

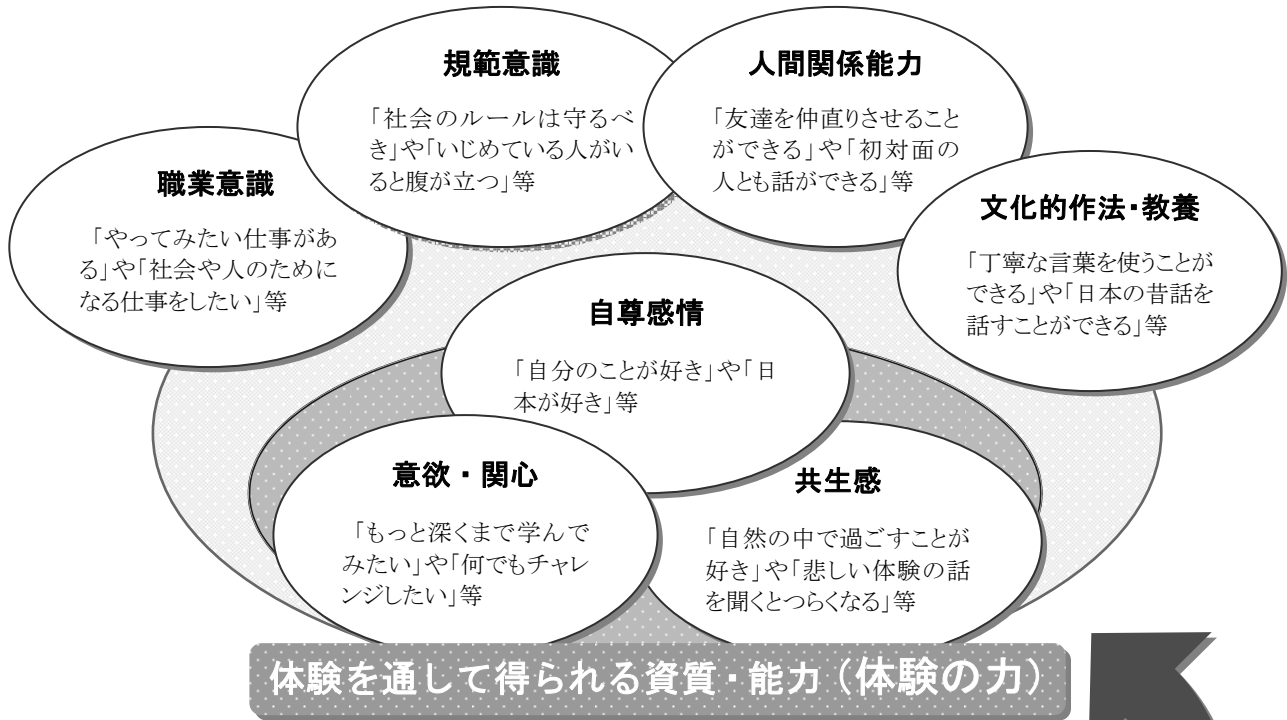
本研究では、体験を通して得られる資質・能力について検討を行った結果、自尊感情や共生感、意欲・関心といった 7 つの要素があると仮定し、これらを総括して「体験の力」と表現している。それぞれの要素を代表する事柄は、下記に示したとおりである。

- (自尊感情) 自分のことが好き、家族を大切にできる 等
- (共生感) 休みの日は自然の中で過ごすことが好き、悲しい体験をした人の話を聞くとつらい 等
- (意欲・関心) もっと深く学んでみたい、なんでも最後までやり遂げたい 等
- (規範意識) 叱るべき時はちゃんと叱れる親が良い、社会のルールは守るべき 等
- (人間関係能力) 人前でも緊張せずに自己紹介ができる、近所の人に挨拶ができる 等
- (職業意識) 大人になったら仕事をするべき、社会や人のためになる仕事をしたい 等
- (文化的作法・教養) お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべき、はしを上手に使うことができる 等

各年齢期における体験と体験を通して得られる資質・能力（体験の力）の関係（イメージ図）

<研究の目的>

本研究は、子どもの頃の体験を通じて得られる資質・能力を検証し、人間形成にとってどの時期にどのような体験をすることが重要になるのかを明らかにすることを目的とした。



各年齢期における体験の程度やその量を検証
※体験の頻度や量を年代別に比較し、
体験の実施状況の変遷を検証

どのような体験が現在の「体験の力」に
関係しているのかを年齢期ごとに検証

各年齢期における子どもの頃の体験

中学生						
高学年						
小学校						
低学年						
小学校						
就学前						

(本報告書を読むにあたって)

- ウェブアンケート調査の対象者はインターネットの利用者に限られていることから、現在の 20 代から 60 代の全ての成人を代表する回答とは異なる可能性がある。そのため、以下の基礎集計結果を読む際は、本調査に限られた結果であるという点に留意する必要がある。
- 本研究は、同じ調査票（一部の設問を除く）を使って、青少年調査では郵送法による調査、成人調査ではウェブアンケート調査と 2 つの手法を用いてアンケート調査を実施した。
- 図に示している回答比率（%）は、小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、その和が必ずしも 100.0%と一致しない場合がある。